

木の葉に回すフィルム

円山まどか

Illustration
hakus

目のまえをなにかが落下していった。

どけられた空気が顔を撫ぜる。その柑橘系に特有の、甘いわりにどこか鋭さをふくんだ香りのおかげでそれが果実であってなにか危険なものじゃないのだとわかった。

とはいえ枝葉に空をさえぎられた山の夜は暗く、だから一瞬ではなにかおこったのか理解し得なかった。しいま思えばそのなにかの果実、が枯葉をつぶした音だったのだろうけれど、まるで足もとに小動物かなにかがやってきてそのうえなぞだかそれが足に纏わりついているような錯覚さえもよおすものだからぶんぶんと空気を蹴ってみたりして、そんな行動を冷静な瞳で見ている妹の視線を感じてふと客観的になってみると滑稽さに穴を掘って埋まりたい気分になりもした。

みっともない部分を見せた。含羞んで笑うと妹も笑った。

「んじゃ、気をとりなおして」

足を踏みだす。しめりきった土の、きもちのわるいやわらかさに靴が沈みこんだ。靴をとおして小石の感触が具に感じられ、枝というにはほそい、けれど生木のしなやかさと硬さをあわせもったこれはおそらく乾燥した松の葉とかそのあたりだろう。妹はその一群に足を踏み入れたらしく横からばきばき、ばきばきと絶え間なくかわいた音がする。

進路を確認しようと顔をあげると、月のうかんでいるのがまず目にはいった。その輪郭は曖昧で、周囲との差異は明確でありながらどこか霽のかかったおぼろげな印象をあたえた。

いや、あれはうかんでいるんじゃない。そのさまにはまるで浮力を感じない。むしろ空のほつれが次第しだいにひろがってひらいた穴、とでもいわれたほうが説得力をもつ。すると穴のむこうには、きっとこことはまったくべつの世界がひろがっているのだ。

……というのは、こどものころから抱きつづけて

きた空想でもある。そのうち穴をとおしてだれか
目があうんじゃないか、だなんて気がして、ばから
しいとは思うけれどいちどそう思ってしまうとにわ
かに戦慄せんりつしてしまって、だから長いあいだ月をなが
めるといふ行為がむかしからどうしてもできないの
だった。

なんだか妙な気分になってすぐに首をおろした。

「月が」

妹に話しかけた。

「なんかへんな感じじゃない？」

妹は首をかじげた。

「まあ主観的なものだけどさ、なんにしても」

妹はうなずいた。

「空に穴が空いてるように見えない？」

妹はうなずいた。

月はあかりとしての機能をはたしていなかった。

自分をみがくことにばかり専念して、光を周囲にほ
とんどわけあたえようとしない。おかげさまで、と

きおり視認できる部分はあるものの視界に映ったほ
とんどのものはおそらくは真の闇といってさえ過言
ではない陰をもっていた。じつと見つめていると目
を開いているのか閉じているのかいまひとつ判然と
しなくなってきた、その感覚は瞬きまばたをくりかえして
も晴れなかった。

そんな具合ぐあいに粘ねばっこい闇はどこかしらフィルムを
まわす直前の映画館めいて、どうかするとその場
には存在しない何者か／何物かを闇を化したスクリー
ンに投影してまんまと怯おびえそうにもなる。だからそ
んな妄想に足をすくわれないうようにせめて足どりばか
りはしつかりと、木の葉や土の感触を足のうらにた
しかめながら歩をすすめることにする。

手に抱えた荷物が重い。

布でくるんでいるはずなのに布を濾こしてなかみの
質感がつたわってきた、そのうえ折に触れて腕から
滑り落ちそうになる。——毛羽けぼだった布が滑りやす
いდანて話はきいたことないぞ。けれどもすぐに、

それは手汗のせいではないかと思いいったつた。

「なあ」

歩をすすめるまま、ふりかえらずに話しかけた。

妹が反応したことは雰囲気から察せられた。

「これ、もつてくれない？」

妹はこたえなかった。

「いや、べつにずっとじゃなくて。交代で」

妹はこたえなかった。

「意外と重くてさ、山道やまみちだろ、腕が疲れちゃって」

妹はこたえなかった。

「ま、そうだよな。自分でも重いものを妹にもたせようってのもアレだよな」

妹はなにもいわない。

そういうえば、むかし妹とはよくひとつの荷物をかわりばんこにもつたものだった。たとえば親にたのまれたおつかいの帰り道なんか。こどもにとつてペットボトルやら大根やらはやはりそれなりに重たく、ビニール袋のもち手はほそく擦これて手のひらに

食いこんだ。だからスーパーマーケットをでると信号にぶつかるたびにじゃんけんをした。負けたほうがつぎの信号まで袋を提げるのだ。

なんだかとてもなつかしいことを思いだしてしまつた。ふりむいて妹にむかしよくやったよな、信号まで交代で荷物もつの、といったら妹がおどろいた顔をして肩のむこうを見るのでなにかと思つてむきなおると、よく肥えた木の幹に顔から衝突した。

しばらく悶もだえてから八ツ当たりして木の幹を蹴つたところ、うえから木の葉がさらさらと錐きりぎりす揉みで落下してきた。頭部に乗つかったそれを虚むなしい気分ではらつてから、気をとりなおしてさらに前進する。

……ちよつと注意力散漫になっているのかもしれないと思う。

さきほどまでは公道をはしっていた。自動車をおいて徒歩で山中をゆくことにしたのは、いきどまりにつきあつたことやさすがに日本でも有数の田舎だけあつて道路がうまく舗装されておらず若葉マー

クの身にはつらかったこと、街灯が皆無に近く視界が不明瞭にすぎることからも詮のない判断だと思ふ。

けれど移動時間からだいたいの距離を計るなんてことは、とうにあきらめていた。もはや鏡ばりになっている、といつてさえ過剰な比喩とは思われないほど四方に寸分たがわずおなじような植物が繁茂して、日中でさえふとした瞬間に方向感覚をうばわれるこの山の夜道に迷うな、というほうが土台無茶な話であつて、そうすると山のちようど中心部に位置する沼沢地を目ざしていちおうは前進しているつもりではあつても、どこをどのようにそれしてしまつていゝるかかわつたものじゃあない。

なんだか本格的に道に迷つてしまつたらしいぞといふことが、とにかくめんどうくさくてかなわない。空気が澄んでいたし、いくらかしめっぽくはあるものの昼間の猛暑にくらべたら清涼とさえいえる。けれども湿気にどうしても身体はなから火照り、いちどでは拭いきれない汗が噴きでてくるのがとにかく

く不快だ。

「がっ」

額を強かにうちつけて、思わず仰け反る姿勢になつた。痛みよりもまさか何者かに見つかりゆく手を阻まれたのだろうか、という不安と焦燥とが同時に全身をめぐつた。それらは血管とはまたべつのルートを使用したものか、心臓からおくりだされた血液が循環するよりもはるかにすばやく全身を満たした。脳の回転は異常にはやいものの無駄な思考に支配されて、下手のかんがえばかりが去来する。しばらくのあいだその場にたちつくしていたけれど、どこかで山、鼻が啼くとその声にびくついてつい手の力がゆるんだ。荷物が絨毯敷きの木の葉へ落下して大仰な音をたてる。音は世界に氾濫して、ふだんから無意識に聞き飛ばしているような物音のひとつひとつさえもがむやみに思わせぶりを纏つて耳に飛びこんでくる有様だ。

妹を呼んだ。

妹はこたえなかった。

それどころか困り顔になってこちらを見るものだからその冷静さにいささか疑問をおぼえて、かるく深呼吸をしてからあらためてながめるとさきほどの衝撃はかたわらに聳える杉の、大風だけれど枝垂れている部分にぶつかっただけらしいぞということが知れ全身の力がぬけた。

「あ、……んだよ、……もお」

おどろかせやがって。

かんちがいだっただけなのに、焦燥の残骸がしつこく作用してうまく支配下にならない声帯をむりやりに震えさせると、吐き捨てた。そんな自分の行動を、冷静な瞳で見ている妹の視線を感じてふと客観的になってみると滑稽さに穴を掘って埋まってしかるのち土をかぶりたい気分になりました。

みっともない部分を見せた。含羞んで笑うと妹も笑った。

「んじゃ、気をとりなおして。ん、いいや。やっぱ

しばらく休憩しよう」

妹も疲れていたのだろう、ちいさくうなずいた。

たったいまひとを無駄に混乱させやがった木の幹から伸びるふとい根に、ふたりして腰をおろす。臀部に凹凸が食いこんで多少痛かったけれど腐葉土に腰をおろすよりはいくらかましに思えたし、なにより幹は背もたれにもなった。背中を木にあずけると、汗でへばりついたシャツがさらに肌にくっついた。

幹の表面のざらざらとした質感がはつきりと知覚され、項のあたりにあるこそばゆい感覚は汗が流れているのか、あるいは蟻かなにかが這っているのか。

杉はまだ若いのかあまり直径がなく、妹とはならぶというよりは背で円を囲むかたちになった。首を横にむけると、肩よりもさきに妹の垂れた黒髪が目にはいる。

ポケットから飴玉をひとつとりだすと、セロフアンの包装紙を展いた。ずつとしまいこんでいたために熱で溶けたのだろう、包装紙と飴玉はかすかにく

つついている。ぱりぱりと力まかせにひきはがして口に抛りこんだ。いかにも人工的ないちごの味が口内にひろがり、それに集中しているとうにか気をとりにおすことができた。こういうとき以前なら煙草を喫っていたはずなのだけれど、禁煙を決意したさいに冗談で煙草を飴玉にかえてみたらこれが案外成功して、いまではこうして飴玉を携帯しているのだった。

「いる？」

妹はうなずいた。ポケットからもうひとつ飴玉をとりだして、妹に手わたす。

「あ」

わたししてから気がついた。

「いちご味とレモン味があるけど」

妹はすでに飴玉を頬ばっていた。なんでもないわ、と告げて、つぎは味を確認してやろうと思う。

目が暗順応してもなおつまびらかにはならないほどの黒は、時間が経過したところで微塵もかわった

ようすがない。木々には鬱陶しいほどの葉が繁茂して蒼暗い空が木だちの合間から仄見えたけれど、光は葉に邪魔されて十全にとどいてるとはいいがたい。

「ねえ、なんだかなつかしい感じだな」

妹は小首をかしげた。

「こうしておちついていると、ね、こどものころいったら、映画。いちどだけ」

妹は納得したように首を縦にふった。

「さつきもふと思ったけど、この暗さ、映画館みただいだ」

と、いい終えるか終えないかといったタイミングで脹脛に疼痛をおぼえた。

はじめは植物の棘にあやまって触れたていどの感覚だった。けれども棘は一瞬ののちには肉にふかく食いこみ、痛みはむしろ熱さといったほうがよいものに変化する。血管に、血液のかわりに熱湯をそそぎこまれてそれが身体じゅうを循環しているかのよ

うにさえ思えた。脹脛にいたってはいまにも爆發し
 そうだ。おそるおそる手を伸ばすと、まるく脹ら
 んでいるのがわかった。脹らみは痛みに比例して肥大
 化する。

そこで手になにか紐状のものが触れた。

それで悟った。

蛇だ。

もしかしたら腰をおろした箇所がちょうど巢穴の
 真上で、おどろいた蛇が敵と判断して襲いかかった
 のかもしれない。あるいはその蛇は寝ぼけていただ
 けなのかもしれない。けれどもとりあえず確実にい
 えるのはどうやら脹脛を噛まれたらしいぞというこ
 と、それとんだかまらずい具合になったなっ
 だけで。懸命に獅噛みついている頭を掴んでひきは
 がした。牙が肉にのこることを危惧したものの肉の
 裂きたいやな感触がして、それは激痛をとまな
 けれどおかげで牙が刺さったままでなかなかぬけな
 い、という最低の事態はとりあえず回避できたみた

いだ。

傷口から流れでるなまあたたかい液体が、靴下に
 じわじわと滲んでいくのが温度でわかる。それはす
 ぐさま靴にまでいたって、気がつけばなんだか水た
 まりに足をつつこんだあとみたいに濡れているけれ
 どそれはきつと汗のせいもあるのだろう。蛇の左右
 をもって両端からひっぱり、骨をはずしてからでき
 るだけ遠くへと抛り投げた。——つもりだったのだ
 けれどにわかには視界がくもってそのうえぶれて、ち
 よつと手をのびただけなのにもすぐ目が眩んでしま
 うから蛇の落下を確認することはかなわな
 った。

そんなに近くには落下していないはずだ、たぶん
 霞んだ視界に妹の影が映る。だいじょうぶだ、とい
 おうとするけれどぜんぜんだいじょうぶじゃなさそ
 うな態度しかとれない。できれば毒を吸いだしてほ
 しい、と思う。けれどもそんなに長いことばは発そ
 うとしても発せない。

妹が手をのばした。やわらかな指さきが手の甲に触れた。その手をにぎると妹も心配そうに手に力をこめる。付着したごくこまかな砂の感触が、妙にはつきりと感じられた。

毒にしてはやく効きすぎるんじゃないかとも思う。だからじつはただの貧血なのかもしれない。それとも蛇の毒なんてこんなものだろうか？ わからないけれどとにかくまだ身体がうごくうちに、と荷を包んでいたタオルを解き、脚のつけ根に強く巻いた。ただし自信はない。力をこめたつもりであっても、いったいどれだけの筋力がいまの自分にあるのかわかったものじゃない。咽喉にちいさななにかが痞えている錯覚がすると、とたんに身体から力がぬけて、と思ったら寒気がしはじめて、けれど同時に発熱しているみたいに熱くなってとなかなか忙しない。

そして記憶がやってくる。あるいは夢がやってくる。ふたつは渾然一体となっていて、じっさいので

きごとなのか脳の勝手な創作を見ているだけなのかはつきりしない。けれどもどちらでもおなじような気がしてきて、どこか傍観めいた距離感をたもちながらやってくるものに身をゆだねるしかできないでいる。

記憶と幻想が混濁し、彼は何かを見失っていく――

続きは『Powers Selection - 新走 - 』で!!